

1 プログラム概要

中国日本友好協会が派遣した中国大学生訪日団第18陣計130名が、1月20日から1月27日までの7泊8日の日程で来日しました。（団長＝王占起（オウ・センキ） 中国日本友好協会・政治交流部部長）

本事業は「JENESYS2.0」の一環として行われ、訪日団は、東京をはじめ、兵庫県、京都府、大阪府を訪問し、同世代の日本の大学生との友好交流と相互理解を深めたほか、日本の経済・経営管理、社会福祉、及び「クールジャパン」を含むさまざまな分野における日本の魅力、強みを体感し、日本に対する包括的な理解を深めました。

2 日程

1月20日（火）

成田国際空港より入国、MEGA WEB 視察、オリエンテーション

1月21日（水）

第1グループ：日本経済に関するセミナー、一橋大学訪問・交流

第2グループ：上智大学訪問・交流、皇居見学、日本の社会保障に関するセミナー
歓迎会

1月22日（木）

第1グループ：東京証券取引所視察、日本銀行視察、皇居見学

第2グループ：あしなが育英会訪問・交流（あしなが心塾レインボーハウス）
兵庫へ移動、和風温泉旅館で日本文化体験

1月23日（金）

第1グループ：北野異人館街見学、神戸大学訪問・交流

第2グループ：大阪へ移動、軽費老人ホーム（ケアハウス）豊寿荘視察、関西福祉科学大学訪問・交流

1月24日（土）

第1グループ：人と防災未来センター視察、ヤクルト本社兵庫三木工場視察、くつのまちながた神戸株式会社シューズプラザ視察、商業施設視察

第2グループ：ATCエイジレスセンター視察、大阪城見学、商業施設視察

1月25日（日）

京都へ移動、第1グループ：嵐山見学、第2グループ：金閣寺見学

地方伝統文化視察・体験（友禅染め）、清水寺見学

1月26日（月）

第1グループ：松下資料館視察、金閣寺見学、大阪へ移動、大阪城見学

第2グループ：オムロン京都太陽株式会社視察、嵐山見学、大阪へ移動
歓送報告会

1月27日（火）

関西国際空港より帰国

3 写真

	
1 月 20 日 MEGA WEB 視察（東京都）	1 月 20 日 オリエンテーション（東京都）
1 月 20 日 考察汽车主题乐园 MEGA WEB（東京都）	1 月 20 日 説明会（東京都）
	
1 月 21 日 日本経済に関するセミナー（東京都）	1 月 21 日 一橋大学訪問・交流（東京都）
1 月 21 日 有关日本经济的讲座（東京都）	1 月 21 日 访问一桥大学并进行交流（東京都）
	
1 月 21 日 上智大学訪問・交流（東京都）	1 月 21 日 日本の社会保障に関するセミナー（東京都）
1 月 21 日 访问上智大学并进行交流（東京都）	1 月 21 日 有关日本社会保障的讲座（東京都）

	
1月21日 歓迎会 川田勉外務省中国・モンゴル第一課地域調整官の歓迎挨拶（東京都）	1月21日 歓迎会 江田五月日中友好会館会長の主催団体代表挨拶（東京都）
1月21日 歓迎会 川田勉外務省中国・蒙古第一課地域調整官致歓迎辞（東京都）	1月21日 歓迎会 江田五月日中友好会館会長代表主办方致辞（東京都）
	
1月21日 歓迎会 談笑する日中の大学生（東京都）	1月22日 東京証券取引所視察（東京都）
1月21日 歓迎会 日中大学生在欢乐畅谈（東京都）	1月22日 考察东京证券交易所（東京都）
	
1月22日 日本銀行視察（東京都）	1月22日 皇居見学（東京都）
1月22日 考察日本銀行（東京都）	1月22日 参观皇居（東京都）

	
1月22日 あしなが育英会あしなが心塾レインボーハウス訪問・交流（東京都）	1月23日 北野異人館街見学（兵庫県）
1月22日 訪問足長（长腿叔叔）育英会足長心塾彩虹屋并进行交流（東京都）	1月23日 参观北野异人馆街（兵库县）
	
1月23日 神戸大学訪問・交流（兵庫県）	1月23日 軽費老人ホーム(ケアハウス)豊寿荘視察（大阪府）
1月23日 访问神戸大学并进行交流（兵库县）	1月23日 考察经济型老人院（护理院）丰寿庄（大阪府）
	
1月23日 関西福祉科学大学訪問・交流（大阪府）	1月24日 人と防災未来センター視察（兵庫県）
1月23日 访问关西福祉科学大学并进行交流（大阪府）	1月24日 考察人与防灾未来中心（兵库县）

	
1月24日 ヤクルト本社兵庫三木工場視察（兵庫県）	1月24日 くつのまちながた神戸株式会社 シューズプラザ視察（兵庫県）
1月24日 考察株式会社養乐多总部 兵庫三木工場（兵庫県）	1月24日 考察长田鞋业神戸株式会社 Shoes Plaza（兵庫県）
	
1月24日 ATC エイジレスセンター視察（大阪府）	1月24日 大阪城見学（大阪府）
1月24日 考察ATC忘年中心（大阪府）	1月24日 参观大阪城（大阪府）
	
1月25日 嵐山見学（京都府）	1月25日 金閣寺見学（京都府）
1月25日 游览岚山（京都府）	1月25日 参观金阁寺（京都府）

	
1月25日 日本文化体験（友禅染）（京都府）	1月25日 清水寺見学（京都府）
1月25日 体験日本文化（友禅染）（京都府）	1月25日 参观清水寺（京都府）
	
1月26日 松下資料館視察（京都府）	1月26日 オムロン京都太陽株式会社視察（京都府）
1月26日 考察松下资料馆（京都府）	1月26日 考察欧姆龙京都太阳株式会社（京都府）
	
1月26日 歓送報告会 王占起団長による訪日活動総括（大阪府）	1月26日 歓送報告会 訪日成果報告（大阪府）
1月26日 欢送报告会 王占起团长对访日活动总结（大阪府）	1月26日 欢送报告会 团员汇报访日成果（大阪府）

4 参加者の感想（抜粋）

○ この数日間の交流活動で最も印象に残ったのは、神戸大学と一橋大学での学生との交流である。一橋大学で出会った4年生は法律を専攻している。彼は将来企業の法務部に入ってから法務アドバイザーになることを決めており、すでに企業で業務実習を始めている。神戸大学4年の女子学生は発展途上国の貧困者を支援するNPOで働きたいと語っていた。彼らは早くから自分の進む方向を定め、目標に向かって努力し続けている。私も同じ大学4年生として彼らを見習うべきだと感じた。自分の人生設計を早めに立てて卒業後の具体的な目標を決め、今からそれに向けて準備を始めるのだ。そうしてこそ、チャンスが到来した時にそれを掴み取り、さらなる前進のために地固めができるのだと思う。

○専門分野：

みずほ総合研究所による「日本経済の現状と課題」のセミナーを受講し、教科書で知り得るマクロ的な知識には限界があることを改めて実感した。アベノミクスの“三本の矢”が内包する論理は、詳しく研究するに値するもので、中国の通貨・財政政策にとっても参考にすべきところが大いにある。また松下幸之助氏の経営道も強く印象に残った。「素直」な心の中国語訳に関して、私自身は「坦誠」はあまり適切ではないと感じたが、untrapped mindには大いに共感を覚え、大先輩の思想に敬服した。

学生交流：

神戸大学と一橋大学を訪れて、まずキャンパスの環境がよいと思った。歴史の重みを感じられ、校門の中に足を踏み入れただけで心が落ち着く。このような雰囲気があるからこそ学業に専念できると思う。二つの大学での交流を経て、相互に訪問し合わなければ中日大学生の相互理解は深まらず、私たちは日本について多くを知らないし、日本の学生もまた中国についてよくは知らないままだと感じた。また大学のサークル活動についての紹介を聞いてとても羨ましいと思った。

○ 私は金融学を専攻している。今回みずほ総合研究所のセミナーを受講し、一橋大学や神戸大学、ヤクルト本社兵庫三木工場、東京証券取引所、松下資料館を訪れることができ、自分の専門分野の勉強にとって得るところが多かった。一橋大学と神戸大学では日本の学生と直接交流する機会を得て、日本の大学のカリキュラムについて知ることができた。今回の経済・経営管理分団は、企業管理に重きを置いていたようで、自分にとってヒントになる事が数多くあった。例えば、「日本経済の現状と課題」のセミナーでは、日本の中小企業戦略や経済政策の概要を知ることができた。ヤクルト本社兵庫三木工場の視察では、日本の工場でのオートメーションによる生産技術が進み、高生産性、低コスト、高品質が実現されていることに加え、飲料産業では絶えずイノベーションが行われ、新製品が生み出されていることに感嘆した。このような効率の高い運営方式は学ぶ価値がある。その他、松下資料館の視察では松下幸之助について更に詳しく知ることができた。松下氏の一部の経歴や業績は、中国の清朝末期の新安商人である胡雪岩氏を彷彿とさせた。両者はともに商業界における奇才であり、共通点も多い。しかし近年、中国社会には信用問題等、残念な現象が起きている。日本を訪れて中国社会の突出した問題をますます実感した。私達もこの問題の解決方法を早急に考えなければならない。

○ 今回の訪問中最も心に残ったことは、日本人の細部に対する敏感さである。私は回族

なので食べられない物があるのだが、同行スタッフの方はすべてのレストランに事前に連絡をし、しかも食事の前には毎回どれが食べてはいけないものかを教えてくれた。レストランのスタッフは、私の座る席のテーブルに標示を付けてくれていた。皆さんにとっては当たり前のことだったのかもしれないが、私にとっては大変助かったし、何より感激した。7日間という期間は長過ぎず短過ぎず、ちょうどよい長さで、スタッフにしても、またレストランやホテルにしても、行く先々で心遣いが感じられ、外国にいながらかえって気持ちの温まる思いだった。日本の経済発展はここに住む人々を傲慢に変えることはなく、逆に謙虚に他に学ぶ心を育んだ。最終日に訪れた松下資料館では「素直」の2文字が私の頭の中に刻みつけられた。パナソニックが大きな業績を上げることができたのは、その経営理念と密接な関係がある。絶えず思考し続けること、正しい人生観、社会観、世界観に立脚すること、自然の法則に従うこと、これらのことはすべての企業にとって成功に通じる道であると思う。日本の電子製品が世界中で売れているのは、日本人が完璧を求めて努力を惜しまず地道にこつこつと働いた結果だ。もし一人の人間がそうしたならその人は必ず成功するだろう。ましてや国民全体がそのような姿勢で奮闘すれば、言うまでもなく目の前の繁栄も道理にかなっている。松下氏の言うように、「なぜ」と問うことが必要であり、なぜ良いのか、なぜ良くないのか、考えなければならぬのだ。帰国後は、私が見たもの、考えたことを周りの人に伝えるつもりだ。摩擦などとるに足りないものである。大切なのは素直な心で向き合い、方法を考えて解決することだ。私たちが見習うべきことはたくさんある。少なくとも今回の訪日は私に深い印象を残してくれた。チャンスがあればこの悠然とした国を是非再び訪れたい。

○ 今回は、日本の旧制三大商科大学のうち一橋大学と神戸大学の2校を視察することができた。古い趣きのあるキャンパスを通り抜け、厳かな雰囲気のある講堂で教授が念入りに準備した講義に耳を傾けながら、日本の大学の知識と文化に対する尊重を感じ取った。きめ細やかな解説からは、経済問題を深く細かく分析する態度を学んだ。どのような経済の問題に対しても、慎重な態度でさまざまな角度から分析を深めてこそ、何らかの収穫と認識を得ることができるのかもしれない。日本の学生との交流では彼らの大学生活について知り、自分たちの生活とどんな違いがあるのかを知ることができた。日本の大学生は在学中にいろいろなサークル活動に参加し、団結力を高めるだけでなく、自分の興味のある分野に挑戦する機会を得て、深く掘り下げていくことができる。在学中にはバラエティ豊かなサークル活動のみならず、海外とのさまざまな交流事業に参加するチャンスも多い。それによって国際的な視野を広げ、オープンで寛容な心で全世界の文化を受入れることが可能になるのである。

○ 日本の市場には「メイド・イン・チャイナ」の商品が溢れている。同時に「メイド・イン・ジャパン」の商品を狂ったように買い求める中国人も溢れている。ヤクルト本社兵庫三木工場と松下資料館を視察し分かったことは、日本の製造業や企業の経営哲学は決して複雑なものではなく、人本位の原則を忠実に守り社会への貢献を常に考えるというベースに立ち、技術の改善とイノベーションを絶えず追求しながら、製品の性能や品質を上げるべく力を尽くす、ということである。中国は低価格に頼って市場を獲得し、さらに「市場を以て技術と交換する」戦略を進めたが、それはじきに失敗に終わるだろう。中国の企業家は日本に学び、心を落ち着けて着実に研究と経営を行い、自己利益獲得を最終目的と

するのではなく、技術の改善とイノベーションを通じて、社会のニーズに合い、人々の心を動かせるような良い製品を造るべきである。現在、「メイド・イン・チャイナ」は世界の中に廉価な製品を送り出しているが、将来は日本とともに高品質な製品を世界に提供できるようにしてほしい。

○ 今回は7日間で4都市を訪れ、私たちの誰もが大きな収穫を得た。以前日本に来たことがあるか否かに関わらず、今回の訪問で全員が全く新しい認識を得たと思う。自分にとって一番印象に残ったことは二つある。

①神戸は海に面し、美しく独特の雰囲気がある街だというイメージを持っていた。しかし今回人と防災未来センターを視察して、神戸がかつて大地震を経験していたことを初めて知った。神戸は関西地域に位置するため、阪神・淡路大震災当時人々の地震に対する意識が低く、それが極めて悲惨な結果を招いた。数多くの建物が倒壊し、負傷者は6,000人以上に及んだ。しかしその復興と発展の速さには本当に驚くばかりで、当時の痕跡は今では微塵も見受けられなかった。都市に関していえば京都も印象深い。茶色の看板を掲げたマクドナルドを初めて目にした時はとても奇妙な感じがしたが、京都市が古都の景観を守るために、建築物はその街の雰囲気と調和したものとし、また商業施設の高さも制限しているとのことだった。こういう保護は賢明で効果的だと私は思う。貴重なものを経済発展のために破壊しないようにしてこそ、初めて都市の風格や特色を維持することが可能なのだ。

②松下幸之助氏の資料館では、社会に対する強い責任感と使命感を持ったすべての日本の大実業家こそが、日本経済と社会発展の大きな原動力なのだと感じた。

今回の日本訪問を経て、帰国後は周りの人に日本のありのままの姿を伝えたい。そしてアジアのもう一つの国の文明を体験してみようことを勧めたい。日本の礼儀、文明、思想は、私たちが掘り下げて考えてみる価値がある。

○ 私は今回が初めての訪日で、滞在中は何もかもが珍しくとても楽しかった。私の周りの人たちは、今回の私の日本行きを知ると皆とても羨ましがった。帰国後は自分で選んだおみやげを彼らに配るだけでなく、日本の文化や食べ物、商品のデザイン、防災システム、日本人の公共マナーや接客の仕方を伝えたい。

今回の訪問では、日本側のきめ細やかな手配のおかげで食事や宿泊には大いに満足したし、日程も充実したものだ。心に残ったことはたくさんある。まず空が青く、空気が清らかなこと。そして日本の公共施設のトイレがとても清潔で、使っていて気持ちがいいこと。次に、日本人は礼儀正しく友好的なこと。路上で人に道を尋ねたら、彼らは喜んで助けてくれた。ヨーロッパに旅行した時と少し感覚が違っていた。ヨーロッパの一部の国の人たちはおそらく人への警戒心が強いのだろう、接していても隔たりを感じてしまう。それから日本の大学の建物はとても美しく、西洋式のスタイルと日本式のスタイルが調和している感じがした。キャンパス内も静かで整然としており、学生との交流も楽しかった。言葉のコミュニケーションはあまりスムーズにいかなかったけれど、皆で連絡先を交換したので、これからもさらに交流を深めることができそう（特に驚いたのは、彼らも微信(WeChat)を使っているということだ。連絡を取り合うのにとても便利である）。

全行程を通じて楽しく過ごしたが、最も心に残っていることは、人と防災未来センターで初めて涙を流したことだ。阪神・淡路大震災の被災者を目にするうちに、中国国内の災

害で家族を失った同胞たちのことが自ずと思い起こされた。災害を前にして国境はない。人と人との関係において、国籍によって交流が阻まれるべきではない。中日両国には政治上の摩擦は多少あるかもしれないが、民間交流を阻むことはできない。それはずっと続いていくことだろう。

○ 経済・経営管理分団の一員として訪れた一橋大学と神戸大学では、模擬講義を体験し、どちらもとても素晴らしかった。いずれの大学も 100 年余の歴史を誇る名門校で、経済や管理の分野ではとても有名である。加えてキャンパスの環境は美しく、大学の選定はとても理想的だ。学生たちとの交流を通して中日両国の学生には多くの共通点があると同時に、それぞれ違う特徴があることも発見した。皆で楽しくおしゃべりをしていると、しばらく振りの友人に会っているような感覚を覚えた。もし中国で大学院に入っていなければ是非日本の大学院に入りたかった。

○ 今回の訪日で最も印象的だった事柄は 2 文字で表すことができる。それは「態度」である。「態度が全てを決める」というのは決して虚言ではない。この 2 文字に、私はこの国の、この民族の先進性があるということを強く実感した。日本人の態度についていくつかの角度から述べたいと思う。

第一に、人に対する態度である。外国人として、また日本人とは微妙な関係にある中国人として、日本人の態度は冷めたものだろうと予想していた。しかし実に予想外であった。日本人は人と相対する時偏見を持たない。困っている人に対しては親切に手を差し伸べ、しかも態度は礼儀正しくフレンドリーである。このことは、何度となく車の乗り降りをしたり、食事をしたり、道を尋ねたり、買い物等をしたりする中で強く感じたことだ。この民族は決して冷淡ではない。ただ常に他人に迷惑をかけまいとしているだけなのだ。

第二に、自然環境に対する態度である。嵐山、清水寺、金閣寺等の名所へ向かう途中で、これらの地域の環境はとても保護されていると感じた。山は青く、水は澄み、中国の観光地のようにゴミが地面に散乱していたりすることはない。名所のみならず、バスの車窓からは常に緑や花が目に入り心が安らいだ。ホテルに戻ればエコを勧める文言があちこちに見られ感慨深かった。

第三に、伝統に対する態度である。歴史的建築物の多くは保存状態が良好であり、近代的な技術を用いることで、実用的で使い勝手のいいものになっている。東京駅や日本銀行、そして京都の大通りや路地もしくり、この点は非常に素晴らしい。また伝統文化といえば、清水寺ではそこかしこで和服姿の人を見かけた。彼らは和服を誇らしく思っているのだ。自ら伝統文化を守り、それを広めようと努めている。例えば、和服姿の人たちの中には外国人が少なからずおり、日本人の伝統文化に対する態度によって、その伝統文化が世界に広められ、認められているということが見てとれる。

最後に、災害に対する態度である。日本は地震が多い。人と防災未来センターを視察し本当に感動した。阪神・淡路大震災は大きな被害をもたらし、現地の人々にとって家族や住む場所を失ったということは、辛い経験であったろう。しかし災害を前に彼らは決して諦めはしなかった。前向きな気持ちで復興のために勇敢に立ち上がったのだ。また松下資料館も視察した。松下氏は幼少の頃に家が零落し、家族を相次いで亡くした。まだ幼いうちに丁稚奉公に出て、学問はなく身体も丈夫ではなかったが、消極的になることはなく、悲観もせずプラス志向で最後には成功を収めた。日本人のこういう前向きかつ勇敢で粘り

強い態度こそ、私達が学ぶべきものではないだろうか？

日本銀行での視察では、特に貨幣の処理が印象に残った。日本に来て紙幣がきれいな状態を保っていることに気付いた。それに比べて、中国で流通している紙幣の多くは汚れていて破損しているものもある。日銀が紙幣に対して行っている全数検査には大いに学ぶべきところがあると思う。これにより通貨の信用度が大きく増し、市場の秩序維持につながるからだ。

神戸大学と一橋大学の二大学では講義を体験する機会に恵まれた。教授の観点や講義のやり方は中国とはだいぶ異なり、大きな収穫を得た。自分の専門知識や能力がまだまだ足りないことを感じ、とてもいい刺激になった。一連の説明や模擬講義を通じて、私たちの隣国である日本の経済状況への理解を深めることができた。両国を対比することで、多くの似通った課題に直面していることや、日本の対処方法を大いに参考にできるということに気付いた。日本の学生との交流では、彼らのパワフルさと学術に対する探究心を感じた。彼らは皆明確な目標と将来設計を持ち、その実現のために努力している。これも中国の大学生が見習うべき点だと思う。

○ 第一に、日本銀行の視察に驚いた。なぜなら、市場調節等を行う国の最も重要な機関が意外にも自ら進んで一般市民にその職能をPRすることに努め、しかもかわいいキャラクターを用いて生き生きとした方法でそれを伝えていたからである。

第二に、学生との交流において日本の名門大学の学生の勉強時間が長いことを知った。毎日平均 7-8 時間とのことで、これは中国に比べてかなり長い。また両国の違いにも気付いた。日本の学生は日本国内で勉強することを望みあまり外国に出たがらない傾向にあるそうだが、これは中国とは異なる点である。

第三に、日本の経済や社会における問題には中国が将来直面するであろう問題が多い。果たして日本のどのような経験に学ぶべきなのか、帰国後にしっかりと総括をしたい。

○ 今回の訪問は、セミナー受講や日本銀行視察、大学交流など一連のプログラムがとても充実した内容だった。日本側の手配に感謝している。

セミナーや模擬講義を通して、私は「アベノミクス」について、より筋道立った、立体的な認識を得ると同時に、現在の日本経済の実態を知ることができた。日本銀行での視察では日本の中央銀行の運営や歴史について学んだだけでなく、紙幣の更新管理についての詳細を知ることができた。経済専攻の日本の学生との交流では、日本の教育理念や体制についてじかに知ることができた。語り合った内容は日本の学生生活や家庭生活の縮図でもあると思う。

交流によって私達は自分のいる位置をはっきりと認識できた。長所を伸ばし、短所を補うことで向上を図っていきたい。

○ 出発前日本への期待で胸をふくらませていた私だったが、思いもよらず期待以上に素晴らしかった。

印象深かったことは主に二つある。一つは、日本人が物事を行うにあたり真面目かつ注意深いこと、そして高い遂行能力を備えている点である。毎日が驚きと感心の連続だった。例えば、日本到着後に配られた旅のしおりには毎日の日程が事細かに記され、さらには宿泊ホテルの設備情報、公式行事の席次、ホテルの館内見取図、訪問先の概要がすべて記さ

れていた。事を行うにあたっては周到かつ気配りが細やかであり、そこには人への配慮の深さと細部への要求の高さが見て取れた。バスがホテルに着けば、スタッフが駆けつけて荷物を卸し、スーツケースのハンドルを引き上げて私たちが取りやすいように並べて置いてくれる。訪問先に行けば必ず資料が用意されている…等々、数多くのディテールが私に深い印象を与え心から感心した。これらの行動や思考の姿勢を私たちは見習うべきである。

もう一つは専門分野に関することである。日本は中国に先立ち高齢化社会に突入し、それに伴い各方面の社会福祉体制も整備が進んでいる。制度の設計以外に、社会におけるハード面の充実ぶりには考えさせられるところが多かった。老人介護にしても、児童や青少年対象の福祉や障害者設備の設計と使用についても、いずれも日本社会の老人や障害者に対する関心の高さと、社会における公平性の重視、そのために多大な努力を払っていることが表れていた。中国はこの面でまだまだ足りない点があることを強く感じた。関連する専門分野を学ぶ学生も含め、より多くの中国人にこのことを伝えたいと考えている。

何はともあれ、日本側の細やかな手配に感謝するとともに、お世話いただいた先生方、尽力くださった関係機関の方、行動を共にした皆さんに感謝する。チャンスがあればこの魅力ある国を是非再び訪れて、もっと広い世界を体験したいと思う。

○ 今回訪問した上智大学と関西福祉科学大学のいずれにおいても、車椅子に座った学生や障害を持つ学生が積極的に活動に加わっていて、溢れるような笑顔で進んで自分の考えを発表していた。日本の学生も、障害を持つクラスメイトに対して普通に接しながら必要な手助けをしていた。私達の大学ではこのようなクラスメイトはほぼ見られないし、大部分の学内設備も障害者に配慮して造られたものではない。もしも車椅子に乗ったり杖を突いた障害者がキャンパスにいたら、大多数の人は奇異と同情のまなざしを向けるであろう。日本の大学では、障害者は健常者の学生と一緒に教育を受け、学生の輪の中に融け込むことができる。またオムロン京都太陽株式会社では、障害者も健常者と同様に働き、報酬を得ることが可能であることを私たちに証明していた。障害者は健常者と同じように勉強や仕事することを望んでおり、日本はこの可能性を私達に証明してくれている。帰国後はこのことを周りの人たちに一番伝えたい。

○ ①社会保障という専攻分野はもともと私の第一志望ではなく、功利的な目でこの分野をとらえ、ただ単に将来職業に就いた時の収入や社会的地位等を考えて、この分野を学んでいた。しかし日本の福祉団体を訪問し、福祉施設や制度の設計がかくも人に優しく人々のニーズを満たしているのを見て、「社会保障」が社会のセーフティネットであり、ソーシャル・ワーカーや福祉施設の職員がかけがえのない存在だと実感した。さらには、現在の中国ではソーシャル・ワーカーを志し、専門的なサービスを提供できる人材が不足していることを改めて考えさせられた。今回の訪問で、中国の社会保障事業に対する自分の責任の重さを感じるとともに、中国の現在の課題を解決するために、日本からもっと多くを学びたいと切に希望するようになった。これは今回の訪日が私にもたらした最大の変化であり、収穫である。

②福祉の多元化は、中国の目指す方向であり、目下それに向けて努力しているところである。日本の「小さな政府、大きな社会」の理念と方法は私たちが学ぶに値するものである。政府による支援以外に、民間企業からの寄付と支援も福祉事業の持続可能な発展を実現する上での一つの要素となる。

○ 今回の訪問で強く心に残ったことはたくさんあるが、おおまかに二つの面に集約できると思う。

一つ目は、日本の社会福祉制度についてである。さまざまな視察や交流を体験した。例えば、上智大学の講義では障害者をコミュニティや家庭に戻す取り組みについての知識を得た。関西福祉科学大学での講義を通じて、日本のソーシャルワークと介護サービスの具体的な種類や運営、研修について、その枠組みを理解した。ATC エイジレスセンターでの視察では、高齢化が深刻化する日本社会における高齢者に対する気配りの細やかさに深く感動した。オムロン京都太陽株式会社の視察の際に、障害者の方が一生懸命に働き、個人的な価値と同時に社会的な価値を創出している姿を目にした時、社会が一貫して強調してきた「平等」という概念がここに具現化されていると感じた。「人に優しい」とはどういうことを指すのかといえば、それはおそらく人に関して起こり得るあらゆる問題を最大限に排除するということである。生活の各方面において貫かれている細部の一つ一つが、社会に生きる人すべてに自由を獲得してもらうという精神を表しているのである。

二つ目は、日本社会が私に与えた驚きである。まず清潔さ。物品にしても街並みにしても汚いものが視界の中に全く入ってこない。そして日本人のフレンドリーで礼儀正しいところである。日本の食べ物や伝統建築、文化もたいへん魅力的である。抹茶、豆腐、天ぷら。それぞれの地域に特色があり、金閣寺や大阪城では歴史の厚みを感じることができた。機会があれば日本の大学院に入って学び、もっとたくさんの経験をしてみたい。

○ 最も強く印象に残ったことは、日本の一部の機器類には「人にやさしい」デザインと「個別化」されたデザインが施されており、それらの特徴が各方面で具現化されているということである。最もよく目にするトイレは、トイレットペーパーを大幅に節約できる上、男女の生理的構造の違いにも配慮されており、大阪や京都等では天気の影響も考慮に入れて、瞬時に加熱できるものがあった。トヨタ自動車の MEGA WEB や ATC エイジレスセンターでは、障害者向けの特製製品が多く展示されていた。中でも印象的だったのは電気自動車で、運転手が急にハンドルを握りしめたりアクセルを踏んだりした時に、間髪を入れずブレーキが作動するもので、運転手が物にぶつかったりして緊張した瞬間にアクセルを踏んでしまっても問題が起こらないようにするものである。こういった精巧な設計は枚挙にいとまがないほどさまざまなところに使われているが、それらに共通する神髄は「個別化」と「専門性」である。

中国大陸に目を向けると、多くの施設が汎用性のあるものであり、「人に優しい」配慮に欠けている。故郷の雲南省で農家が通常使っている農機は、馬力は大きい安全ではなく、不注意で転んでしまったり、毎年太ももや腕を巻き込まれて切断されてしまう人が出る。このような機械が広く使われているのは、身体と命が軽視され具体的な作業への配慮が足りないことの表れであり、本当に心が痛む。

つまり創造科学研究の面で中国はもっと多くを日本に学ぶべきである。「人に優しい」デザインと「個別化」デザインの理念がその最たるものとなることは間違いない。

○ 日本を訪れるにあたり多くの疑問を持っていたが、8日間の体験を通じて私の頭の中で日本の輪郭が徐々にはっきりとしたものになっていった。大通りから路地に至るまで清潔で整然としていることや、日本人が慎重で時間を守ること、日程がそれぞれ関連性を持たせて組まれていることが印象的であった。日本社会は素晴らしく管理が行き届いた社

会であると感じた。この社会は、近代的なものと伝統的なもの、理性と芸術、科学と美の調和という点では比類がなく、近代化のパワーと資本主義の奔流が国民の特性や気風を壊してしまうことはなかった。これらは日本社会の外来文化に対する高度な融合力によるものであり、根っこの部分では、日本人が個人、集団、国家の生存という点から出発し、それにより強いパワーが生み出されているからだと思う。これが、平和な時も危険に備えて準備を怠らず、災難に見舞われてもなおも秩序を失わない精神となっている。強固な社会的信用という条件の下、陽明学の「知行合一」等の思想の影響を受け、日本人は強大な遂行能力を有している。

今回の訪問における各種活動の手配や体験のすべてが、今述べた私の思考の下地となっている。中国は日本とは一衣帯水の関係であるが、近代化の段階は異なっている。源は同じだが今では日本の文化とは異なる。中国が自己の伝統文化の知恵を継承し発揚するには、日本に学ぶ必要がある。日本という鏡の中に、真の中国の姿を見つけたということ、これが今回の最大の収穫である。